

令和 8 年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第 4 号（8 月予報）

令和 8 年 7 月 28 日 秋 田 県 病 害 虫 防 除 所

◇今回の予報対象期間は 8 月を主とします。次回の発表は令和 8 年 8 月 25 日の予定です。

◇病虫害発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇秋田県では「秋田県総合防除計画」を策定し、化学農薬のみに依存しない総合防除を推進しています。病虫害を防除する場合は、本計画を参照し総合防除に取り組んでください。本計画は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。
<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病虫害防除所
トップページ

I. 予報の要点

水 稲	穂いもちの発生量はやや少ないと予想されますが、ほ場によって葉いもちの発病程度は異なるため、ほ場を巡回し、発病状況に応じて防除対策を実施してください。 斑点米カメムシ類の発生量が多いと予想されます。7 月 28 日発表の注意報第 1 号を参照して防除を実施してください。
大 豆	紫斑病の感染量はやや多いと予想されます。開花期 20～30 日後に薬剤を莢によく付着するように散布してください。
野菜・花き	病害ではねぎ（夏どり）の黒斑病・葉枯病、きゅうりのべと病、褐斑病、炭疽病の発生量が多いと予想されます。発病を確認した場合は、治療効果のある薬剤を葉の全体にかかるように散布してください。 虫害ではねぎ（秋冬どり）のネギハモグリバエ、トマトのアザミウマ類、えだまめの食葉性鱗翅目幼虫、ダイズサヤタマバエの発生量が多いと予想されます。ほ場での発生状況を確認して防除を実施してください。
果 樹	病害では、りんごの褐斑病、なしの輪紋病の発生量がやや多いと予想されます。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くしてください。 害虫では、りんごのハダニ類、ぶどうのアザミウマ類がやや多いと予想されます。発生が多い園地では直ちに防除をしてください。 果樹カメムシ類の発生量はやや少ないと予想されますが、突発的に飛来数が多くなる可能性があるため、園地への飛来状況をよく観察してください。

Ⅱ．主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病（穂いもち）	全県	早い	やや少ない	やや少ない
	紋枯病	全県	－	平年並	やや多い
	ごま葉枯病（穂枯れ）	全県	早い	多い	多い
	セジロウンカ （第 1 世代）	全県	遅い	平年並	平年並
	斑点米カメムシ類（第 2 世代成虫）	全県	早い	多い	多い
	（アカスジカスミカメ）		早い	多い	多い
	（アカヒゲホソミドリカスミカメ）		早い	多い	多い
大 豆	紫斑病（子実）	全県	やや早い	－	やや多い
	ウコンノメイガ	全県	－	やや少ない	平年並
	アブラムシ類 （ジャガイモヒゲナガアブラムシ）	全県	－	平年並	平年並
	（ダイズアブラムシ）		－	平年並	やや少ない
	（ダイズアブラムシ）		－	平年並	やや多い
	吸実性カメムシ類 （ホソヘリカメムシ）	全県	－	やや少ない	平年並
	フタスジヒメハムシ	全県	－	－	多い
	マメシンクイガ	全県	平年並	－	平年並
ねぎ （夏どり）	ダイズサヤタマバエ	全県	－	やや多い	多い
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	－	やや多い	多い
	黒斑病・葉枯病	全県	－	やや多い	多い
	アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	全県	－	平年並	やや多い
ねぎ （秋冬どり）	ネギハモグリバエ	全県	－	やや少ない	平年並
	シロイチモジヨトウ	全県	－	平年並	平年並
	黒斑病・葉枯病	全県	－	平年並	やや多い
	アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	全県	－	少ない	平年並
きゅうり	ネギハモグリバエ	全県	－	やや多い	多い
	シロイチモジヨトウ	全県	－	平年並	平年並
	べと病	全県	－	多い	多い
	うどんこ病	全県	－	平年並	平年並
	褐斑病	全県	－	多い	多い
	斑点細菌病	全県	－	やや多い	やや多い
	炭疽病	全県	－	多い	多い
トマト	アブラムシ類 （ワタアブラムシ）	全県	－	やや少ない	平年並
	ワタヘリクロノメイガ	その他	－	やや少ない	平年並
	葉かび病	全県	－	やや少ない	やや少ない
	すすかび病	全県	－	平年並	やや多い
	灰色かび病	全県	－	やや少ない	少ない
	うどんこ病	全県	－	平年並	やや多い
	アザミウマ類 （ヒラズハナアザミウマ）	全県	－	多い	多い
えだまめ	トマトキバガ	全県	－	－	－
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	－	やや多い	多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	－	やや多い	多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	—	やや多い
	ハスモンヨトウ	全県	—	—	やや多い
りんご	斑点落葉病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	平年並	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	やや多い	やや多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	平年並	やや少ない
	ハダニ類 (ナミハダニ、 リンゴハダニ)	全県	—	平年並	やや多い
	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	全県	—	やや少ない	やや少ない
	キンモンホソガ	全県	—	やや多い	やや多い
な し	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	黒斑病	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	やや多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、 リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	平年並
	灰色かび病	県南部	—	平年並	平年並
	晩腐病	県南部	—	—	平年並
	アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	県南部	—	平年並	やや多い

Ⅲ．発生予報と防除対策

A 水稻

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 いもち病（穂いもち）	早い（－）	やや少ない（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ ７月１７日発表の作況ニュース第６号によると、あきたこまちの生育は早い（－/ ）。

ウ ７月５半旬の巡回調査（８０地点）における葉いもちの発病株率は０．６％（平年２．４％）、同地点率は７．５％（平年１３．３％）でいずれもやや低かった。穂いもちの主な伝染源となる上位２葉の葉いもちの発病株率は０．１％（平年０．２％）、同地点率は１．３％（平年３．２％）でいずれもやや低かった（－/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ほ場を巡回し、いもち病の発病状況に応じて防除対策を講じる。

イ ほ場によって出穂期が異なることから、出穂状況を確認して茎葉散布を行う。

ウ 葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂１５～７日前にコラトップ剤又はゴウケツ粒剤／サンブラス粒剤を散布するか、出穂直前にトライフロアブルかビーム剤と穂揃期にトライフロアブルかラブサイド剤を茎葉散布する。

エ 葉いもちが多発しているほ場では、上記に加え必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。

オ 葉いもちの発生がない場合は、穂いもち防除の必要はない。ただし、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合は、出穂期～７日後に予防剤（トライフロアブルかラブサイド剤）の茎葉散布を行う。

カ 本田での総使用回数は、テブフロキン剤（トライ剤）は２回、フサライド剤（ラブサイド剤、ブラシン剤等）及びトリシクラゾール剤（ビーム剤、ノンブラス剤等）はそれぞれ３回以内であるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 紋枯病	－	やや多い（－）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/+）。

イ ７月４～５半旬の巡回調査（８０地点）における発病株率は１．５％（平年１．５％）で平年並、同地点率は５．０％（平年１３．２％）でやや低かった（－/±）。

ウ ７月１７日発表の作況ニュース第６号によると、７月１５日現在のあきたこまちの茎数は多い（－/+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が１５％を超えた場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

イ 水稻の出穂期が早まると見込まれることから、防除時期を逸しないように注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ごま葉枯病（穂枯れ）	早い（－）	多い（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/+）。
- イ ７月17日発表の作況ニュース第６号によると、水稻の生育は早い（－/ ）。
- ウ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における発病株率は0.5％（平年0％）、同地点率は5.0％（平年0％）でいずれも高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 砂質かつ、秋落ちが認められるＣＥＣが低い水田（15meq/100g未満）において、幼穂形成期～穂ばらみ期に本病の発病がみられた場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブル又はブラシンフロアブルで防除する。
- イ 本年は出穂期が早まると見込まれることから、防除時期を逸しないように注意する。
- ウ 本田での総使用回数は、フサライド剤（ブラシン剤、ラブサイド剤等）及びトリシクラゾール剤（ノンブラス剤、ビーム剤等）はそれぞれ３回以内であるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 セジロウンカ（第１世代）	遅い（前年より遅い）	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 初飛来は７月15日（平年６月29日）で遅かった（+/-）。
- ウ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における本田のすくい取り調査の成幼虫数は1.6頭（平年1.6頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 有効積算温度計算シミュレーション（J P P－N E T、気象観測地点：秋田）による初飛来時期を起点とした第１世代幼虫の発生時期は、８月６日頃と推定される。
- イ 本虫の要防除密度は、中老齢幼虫が株当たり15頭以上（粘着板法四株叩き式では全幼虫数が株当たり35頭以上）である。
- ウ 出穂期10日後頃にアルバリン/スタークル剤により斑点米カメムシ類の防除を実施した場合は、本虫を対象とした薬剤防除の必要はない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 斑点米カメムシ類（第２世代成虫） （アカスジカスミカメ） （アカヒゲホソミドリカスミカメ）	早い（前年並） 早い（前年並） 早い（前年並）	多い（前年より多い） 多い（前年より多い） 多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/+）。
- イ ７月４～５半旬の巡回調査（80地点）における水田内でのアカスジカスミカメ（以下、アカスジ）のすくい取り数は1.1頭（平年0.5頭）で多く、発生地点率は13.8％（平年9.7％）で高かつ

た（ /+）。アカヒゲホソミドリカスミカメ（以下、アカヒゲ）のすくい取り数は0.5頭（平年0.2頭）で多く、発生地点率は17.7%（平年11.7%）で高かった（ /+）。

同調査における畦畔でのアカスジのすくい取り数は2.4頭（平年2.9頭）で平年並、発生地点率は31.3%（平年19.3%）で高かった（ /+）。アカヒゲのすくい取り数は3.7頭（平年2.5頭）でやや多く、発生地点率は45.0%（平年31.7%）で高かった（ /+）。

ウ 予察灯調査（5地点）における7月1～4半旬の総誘殺数は、アカスジが322頭（平年121.8頭）、アカヒゲが1,530頭（平年587.0頭）でいずれ也多かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 7月28日発表の注意報第1号を参照して、防除を徹底する。

6 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ニカメイガ （2回発生地帯の 第2世代）	—	平年並	平年並	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
コブノメイガ	—	やや少ない	やや少ない	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
トビイロウンカ	—	平年並	平年並	7月5半旬まで飛来は確認されていない。
ヒメトビウンカ	—	やや多い	やや多い	斑点米カメムシ類との同時防除に努める。
ツマグロヨコバイ	—	平年並	平年並	7月5半旬の巡回調査において発生は確認されなかった。
フタオビコヤガ （第3世代）	—	やや少ない	やや少ない	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
アワヨトウ	—	やや少ない	やや少ない	7月4半旬まで飛来は確認されていない。 今後の予察情報に注意する。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1 紫斑病（子実）	やや早い（－）	やや多い（－）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ 前年収穫期の被害粒率から、越冬伝染源量はやや多いと推定される（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 開花期20～30日後にジマンダイセン水和剤/ペンコゼブ水和剤（RACコード：M3）、トライフロアブル（同：U16）、ニマイバー水和剤（同：10・1）、フセキフロアブル（同：53）、ブランドム乳剤25（同：3）、クミガードSC（同：M1）、Zボルドー（同：M1）、Zボルドー粉剤DL（同：M1）のいずれかを散布する。ただし、着莢期に降雨が多い場合は、1回目散布の約10日後に追加防除を行う。

イ RACコードが1、3、10、53、U16の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため、各1回の使用とする。

- ウ 無人航空機で防除する場合は、ニマイバー水和剤、フセキフロアブル、プランダム乳剤25のいずれかを各1回使用し、2回散布を基本とする。
- エ ジマンダイセン水和剤/ペンコゼブ水和剤は使用時期に注意する（収穫45日前まで）。
- オ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ウコンノメイガ	－	平年並（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月5半旬の巡回調査（16地点）における茎当たり卵塊数は0個（平年0.02個）でやや少ない、叩き出し成虫数は0.4頭（平年0.6頭）、葉巻発生株率は5.1%（平年6.2%）、同発生地点率は43.8%（平年42.0%）でいずれも平年並だった（ /±）。
- ウ 予察灯調査（5地点）における7月1～4半旬の総誘殺数は2頭（平年7.9頭）でやや少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害は生育が旺盛なほ場で多い傾向にあるので、よくほ場を観察する。
- イ 7月6半旬にはほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上ある場合は、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、プレバソンフロアブル5のいずれかを散布する。
- ウ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤又はプレバソンフロアブル5を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 アブラムシ類 （ジャガイモヒゲナガアブラムシ） （ダイズアブラムシ）	－	平年並（前年よりやや多い） やや少ない（前年並） やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ジャガイモヒゲナガアブラムシ（ /－）、ダイズアブラムシ（ /+））。
- イ 秋田市予察ほにおける7月5半旬の発生株率は、ジャガイモヒゲナガアブラムシが0%（平年1.3%）、ダイズアブラムシが0%（平年2.1%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発生が多く見られる場合は、アグロスリン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 吸実性カメムシ類 （ホソヘリカメムシ）	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 秋田市予察ほのフェロモントラップにおけるホソヘリカメムシの7月1～4半旬の総誘殺数は

6頭（平年12.4頭）でやや少なかった（ /－）。

ウ 予察灯調査（5地点）における7月1～4半旬の総誘殺数は0頭（平年2.0頭）でやや少なかった（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア アグロスリン乳剤、アディオオン乳剤、パーマチオン水和剤などで8月中旬～9月上旬に1～2回散布する。

イ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンエアー、トレボンスカイMCのいずれかを8月中旬～9月上旬に2回散布する。

ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 フタスジヒメハムシ	－	多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ 前年収穫期の被害粒率から越冬量はやや多いと推定される（ /＋）。

（2）防除上注意すべき事項

ア アグロスリン乳剤やトレボン乳剤などでマメシНКイガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 マメシНКイガ	平年並（前年並）	平年並（前年よりやや多い）

（1）予報の根拠

ア 成虫の羽化は日長に影響されるので、発生時期の変動は小さい（±/ ）。

イ 前年収穫期の被害粒率から越冬量は平年並と推定される（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 連作により密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。

① アグロスリン乳剤、アディオオン乳剤、パーマチオン水和剤は、8月下旬～9月上旬に1回散布する。

② トレボン剤、プレバソフフロアブル5などは9月上旬に1～2回散布する。ただし、前年多発しているほ場では、2回散布する。

③ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソフフロアブル5のいずれかを9月上旬に2回散布する。

イ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ダイズサヤタマバエ	－	多い（－）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ 7月中旬のえだまめの巡回調査における被害莢率は0.2%（平年0.1%）でやや高かった（ /＋）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア 開花日10日後頃にアルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、スミチオン乳剤などを散布する。
- イ 無人航空機で散布する場合は、スタークル液剤10/スタークルメイト液剤10を開花日10日後頃に散布する。
- ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 食葉性鱗翅目幼虫	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬のえだまめの巡回調査における発生茎率は1.1%（平年2.3%）で平年並、食害茎率は54.1%（平年31.1%）でやや高かった（ /+）。
- ウ 予察灯調査（5地点）における7月1～4半旬のツメクサガの総誘殺数は1頭（平年1.3頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、ブロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。無人航空機で防除する場合は、トレボンエア―、ブロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒斑病・葉枯病	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ 7月4～5半旬の巡回調査における発病株率は11.6%（平年6.1%）でやや高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 適正な肥培管理を行う。
- イ 両病害は病徴観察による識別が困難なため、両方に効果があるアミスター20フロアブル、カナメフロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルなどを散布する。なお、収穫時期が近い場合は、使用時期や使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は26.6%（平年27.9%）で平年並だった

(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア アグロスリン乳剤 (RACコード: 3A)、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤 (同: 4A)、グレーシア乳剤 (同: 30)、ダントツ水溶剤 (同: 4A)、ディアナSC (同: 5)、ファインセーブフロアブル/アベンジャーフロアブル (同: 34)、ベネビアOD (同: 28)などを茎葉散布、又はダントツ粒剤 (同: 4A)、プリロツソ粒剤オメガ (同: 28)、ミネクトデュオ粒剤 (同: 28・4A)を株元散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ネギハモグリバエ	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は0.7% (平年5.7%)でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤 (RACコード: 3A)、グレーシア乳剤 (同: 30)、ダブルシューターSE (同: 5・未)、ダントツ水溶剤 (同: 4A)、ディアナSC (同: 5)、ベネビアOD (同: 28)などを茎葉散布、又はダントツ粒剤 (同: 4A)、プリロツソ粒剤オメガ (同: 28)、ミネクトデュオ粒剤 (同: 28・4A)を株元散布する。
特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統 (バイオタイプB)の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シロイチモジヨトウ	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は0% (平年0.2%)で平年並だった (/±)。

ウ 防除適期決定ほ (2地点)のフェロモントラップにおける7月1～4半旬の総誘殺数は123頭 (平年198.8頭)で少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫が作物内に食入すると薬剤がかかりにくくなる。また、老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するので、発生初期にアグロスリン乳剤 (RACコード: 3A)、ゼンターリ顆粒水和剤 (同: 11A)、ノーモルト乳剤 (同: 15)、ディアナSC (同: 5)、ベネビアOD (同: 28)などを散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ 薬剤の感受性低下が疑われる事例があるため、使用薬剤の選定に注意する。

D ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒斑病・葉枯病	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /＋）。

イ ７月４～５半旬の巡回調査における発病株率は3.4％（平年2.5％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	－	平年並（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ７月４～５半旬の巡回調査における食害株率は4.5％（平年16.5％）で低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ネギハモグリバエ	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ７月４～５半旬の巡回調査における食害株率は5.5％（平年2.9％）でやや高かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シロイチモジヨトウ	－	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ７月４～５半旬の巡回調査における食害株率は０％（平年0.2％）で平年並だった（ /±）。

ウ 防除適期決定ほ（２地点）のフェロモントラップにおける７月１～４半旬の総誘殺数は123頭（平年198.8頭）で少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ねぎ（夏どり）に準じる。

E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ベと病	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ７月後半の巡回調査における発病株率は24.6％（平年15.3％）で高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 敷きわらなどを行い、雨による土のはね上りを防ぐ。

イ 発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゾーベックエニベル顆粒水和剤（同：49・M3）、ベトファイター顆粒水和剤（同：27・40）、ホライズンドライフロアブル（同：27・11）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などの治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、高温時の使用を避け、浸透性を高める展着剤を加用しない。

オ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが4、11、21、40、49の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 うどんこ病	－	平年並（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ７月後半の巡回調査における発病株率は0％（平年0.4％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、トリフミン剤（同：3）、パルミノ（同：M10）、ポリオキシンAL水和剤（同：19）、ポリベリン水和剤（同：19・M7）などの薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。アミスター20フロアブルは薬害防止のため、高温時の使用を避け、浸透性を高める展着剤を加用しない。

イ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 褐斑病	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ ７月後半の巡回調査における発病株率は5.0％（平年0.5％）で高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ 発病後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル（RACコード：M1・M5）、

ジマンダイセン水和剤（同：M3）、セイビアーフロアブル20（同：12）、ダコニール1000（同：M5）などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤（同：10・2）など、治療効果のある薬剤を散布する。また、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ ベンゾイミダゾール系剤（RACコード：1）、SDHI剤（同：7）、QoI剤（同：11）では耐性菌が確認されているので、防除しても効果が低い場合は異なるRACコードの薬剤を選択する。

エ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 斑点細菌病	—	やや多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は11.0%（平年6.6%）でやや高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 過剰施肥をしない。また、過繁茂を避け、通風を改善する。

イ 発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 銅水和剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。

エ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 炭疽病	—	多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は4.6%（平年1.4%）で高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ ジマンダイセン水和剤や銅水和剤による予防散布に努めるとともに、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゲッター水和剤（同：10・1）など、治療効果のある薬剤を散布する。アミスター20フロアブルは薬害防止のため、高温時の使用を避け、浸透性を高める展着剤を加用しない。

ウ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 アブラムシ類 （ワタアブラムシ）	—	平年並 （前年よりやや少ない）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

- イ 7月後半の巡回調査における発生株率は5.4%（平年7.3%）でやや低かった（ /－）。
- (2) 防除上注意すべき事項
- ア ほ場周辺の除草を徹底する。
- イ ウイルスの伝染を防ぎ、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。
- ウ 定期的に、コルト顆粒水和剤（RACコード：9B）、モスピラン顆粒水溶剤（同：4A）などを散布する。ただし、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ワタヘリクロノメイガ	－	平年並（前年並）

- (1) 予報の根拠
- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ 7月後半の巡回調査における発生株率は0%（平年0.8%）でやや低かった（ /－）。
- (2) 防除上注意すべき事項
- ア 初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。
- イ アファーム乳剤（RACコード：6）、グレーシア乳剤（同：30）などを散布する。ただし、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉かび病	－	やや少ない （前年よりやや少ない）

- (1) 予報の根拠
- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年4.9%）でやや低かった（ /－）。
- (2) 防除上注意すべき事項
- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病前からダコニール1000（RACコード：M5）、ベルコート水和剤（同：M7）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 すすかび病	－	やや多い（前年よりやや多い）

- (1) 予報の根拠
- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /＋）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。
- (2) 防除上注意すべき事項
- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。

イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などを散布し予防に努める。発病が確認されたらフセキワイドフロアブル（同：53・M7）、ニマイバー水和剤（同：10・1）、トリフミン水和剤（同：3）、ファンベル顆粒水和剤（同：11・M7）などを散布する。

エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 灰色かび病	－	少ない（前年より少ない）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /－）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0％（平年2.6％）でやや低かった（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。

イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 発病前からロブラール水和剤（RACコード：2）、ベルコート水和剤（同：M7）、ミギワ10フロアブル（同：52）などを散布し予防に努める。

エ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。特にRACコードが1、2の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 うどんこ病	－	やや多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /＋）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0％（平年0％）で平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ 発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などを散布し予防に努める。発病が確認されたらパンチョTF顆粒水和剤（同：3・U6）、ラミック顆粒水和剤（同：M7・50）を散布する。

ウ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、50の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 アザミウマ類 （ヒラズハナアザミウマ）	－	多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ 北秋田市防除適期決定ほにおける7月1～4半旬の青色粘着板への誘殺数は1,644頭（平年782.7頭）で多かった（ /＋）。

ウ 7月中旬の巡回調査における被害果率は0.5％（平年0.0％）で高かった（ /＋）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 7月16日発表の防除対策情報第7号を参照し、防除対策を徹底する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 トマトキバガ	－	－（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（3地点）における7月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は63頭（前年188.6頭）だった。

ウ 7月中旬の巡回調査における食害株率、被害果率はともに0%だった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 防虫ネットを展張しているハウスでは、ハウスへの出入り時の扉の開閉は素早く行うよう努める。

イ 食害された葉や果実などはほ場内に放置せず、土中深く埋没するか、ビニル袋などに入れて密閉して本虫を死滅させた後、適切に処分する。

ウ 本虫は繁殖能力が高いため発生が見られた場合は、直ちにディアナSC（RACコード：5）、アファーム乳剤（同：6）、エスマルクDF（同：11A）、ヨーバルフロアブル（同：28）、グレーシア乳剤（同：30）などを茎葉散布する。

エ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

7 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
疫病	－	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 （ワタアブラムシ、 モモアガアブラムシ）	－	平年並	平年並	

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 食葉性鱗翅目幼虫	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における発生茎率は1.1%（平年2.3%）で平年並、食害茎率は54.1%（平年31.1%）でやや高かった（ /+）。

ウ 予察灯調査（5地点）における7月1～4半旬のツメクサガの総誘殺数は1頭（平年1.3頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、プロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。無人航空機で防

除する場合は、トレボンエアー、ブロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ダイズサヤタマバエ	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ ７月中旬の巡回調査における被害英率は0.2%（平年0.1%）でやや高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 中晩生品種では開花日（ほ場全体の50%程度が開花した日）10日後頃に１回、晩生品種では開花日７日後頃及び14日後頃にアルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤を散布する。無人航空機で防除する場合は、スタークル液剤10/スタークルメイト液剤10を開花日７日後頃及び14日後頃に散布する。

イ 中晩生品種又は晩生品種でスミチオン乳剤、トレボン乳剤、ダイアジノン粒剤５を選択する場合は、開花日頃及び開花日７日後頃に散布する。

ウ 乳剤、顆粒水溶剤の散布液量は200～300L/10aとし、英によく付着するように散布する。また、粒剤を使用する場合は、ほ場全体に均一に散布する。

H 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 オオタバコガ	－	やや多い （前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（３地点）における７月１～４半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は69頭（平年31.1頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 被害痕の近くには幼虫が潜んでいるので、注意深く観察し捕殺する。

イ 初期被害の早期発見に努め、発生初期に薬剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ハスモンヨトウ	－	やや多い（－）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（２地点）における７月１～４半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は1,006頭（平年1,344.5頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 被害痕の近くには幼虫が潜んでいるので、注意深く観察し捕殺する。

イ 初期被害の早期発見に努め、発生初期に薬剤で防除する。

ウ 薬剤の感受性低下が疑われる事例があるため、使用薬剤の選定に注意する。

I りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点落葉病	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は1.1%（平年2.3%）でやや低く、同地点率は45.0%（平年77.1%）で低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤に加用し散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、他の防除時期を含め使用回数は1回とする。

イ 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒星病	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病新梢率は0%（平年2.4%）、同地点率は0%（平年13.9%）でいずれも低く、発病果率は0.0%（平年0.3%）でやや低く、同地点率は5.0%（平年6.4%）で平年並だった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病葉、発病果は見つけ次第摘み取り、焼却などにより適切に処分する。

イ 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ QoI剤（RACコード：11）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤に加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 炭疽病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）、同地点率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。

イ 二次感染防止のため被害果は見つけ次第摘み取り、土中に埋めるなどにより適切に処分する。

ウ 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

エ Q o I 剤（RACコード：11）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤に加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4 輪紋病	—	平年並（—）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ / ± ）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ 防除薬剤は約２週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ Q o I 剤（RACコード：11）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤に加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 褐斑病	—	やや多い（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ / ± ）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.3%（平年0.3%）、同地点率は10.0%（平年6.8%）でいずれも平年並だった（ / ± ）。

ウ 7月中旬の横手市予察ほにおける新梢葉の発病葉率は47.6%（平年7.8%）で高かった（ / + ）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 枝が重なった部分に多発するので、不要な徒長枝を除去する。

イ 防除薬剤は約２週間間隔で散布するが、天候不順で冷涼、多雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ 多発が予想される場合は、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）又はオンリーワンフロアブル（同：3）を保護殺菌剤に加用し散布する。

エ DMI 剤耐性菌が確認されている地域及びびりんご黒星病防除にDMI 剤（RACコード：3）を使用した園では、褐斑病の防除にDMI 剤を使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	やや少ない （前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0.1%）で平年並、同地点率は0%（平年3.9%）でやや低かった（ / ± ）。

イ 防除適期決定ほ（4地点）における7月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数の合計は59頭（平年77.2頭）でやや少なかった（ / - ）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ ピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.5頭（平年0.6頭）で平年並、同地点率は45.0%（平年59.5%）でやや低かった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。

ウ エコマイト顆粒水和剤とダニゲッターフロアブルは、作用点が同一であるため、いずれか1回の使用とする。

エ ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

オ オマイト水和剤は葉害（黄変落葉）が発生することがあるので8月中旬以降に使用する。

カ コロマイト乳剤は、高温時に散布しない（黄変落葉）。

キ 他の殺菌剤及び殺虫剤と混用する場合は次の点に注意する。

- ① コロマイト乳剤はストライド顆粒水和剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
- ② カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ③ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ④ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する（凝集の回避）。
- ⑤ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
- ⑥ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における被害果率は0.1%（平年0.2%）、同地点率は10.0%（平年19.0%）でいずれもやや低かった（ /－）。

ウ 防除適期決定ほ（4地点）における7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は23頭（平年89.3頭）で少なかった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 園地への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。
- イ 発生が多い園地では、ネオニコチノイド系剤（RACコード：4A）、ピレスロイド系剤（同：3A）を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9 キンモンホソガ	－	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における食害葉率は0.5%（平年0.2%）でやや高く、同地点率は45.0%（平年26.0%）で高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。
- イ 発生が多い園地では、８月上旬にピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。また、８月下旬に発生量の多い場合は９月上～中旬にも防除する。

10 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ハマキムシ類	－	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

J なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	－	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.0%（平年0.1%）で平年並、発病果率は0.1%（平年0.2%）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は早めに除去し、園地外へ搬出して適切に処分する。
- イ オキシラン水和剤（RACコード：M4・M1）、オーソサイド水和剤80（RACコード：M4）などを８月上旬まで10日間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	—	やや少ない (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0%（平年3.2%）でやや低く、発病果率は0%（平年0.1%）で平年並だった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 本病の発生が多い品種は南水、八雲、二十世紀である。

イ 枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除し、適切に処分する。

ウ オキシラン水和剤（RACコード：M4・M1）を8月上旬まで10日間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 輪紋病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源であるいば病斑の多い枝は切除し、焼却処分する。幹や太枝は粗皮削りを行う。

イ キャプレート水和剤（RACコード：M4・1）、オキシラン水和剤（同：M4・M1）、オーソサイド水和剤80（同：M4）などを8月上旬まで10日間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

イ 防除適期決定ほ（3地点）における7月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数の合計は60頭（平年67.1頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ ピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。

ウ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.01頭（平年0.03頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 徒長枝の切除、焼却を行い、夏期の発生源を少なくする。
- イ 発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。
- エ 殺ダニ剤を使用する際は、次の点に注意する。
- ① コロマイト水和剤は高温・乾燥時や樹勢が弱っている場合は、葉に薬害（黄変落葉）を生じるおそれがあるので散布しない。
 - ② ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0.0%）、同地点率は0%（平年6.9%）でいずれもやや低かった（ /-）。
- ウ 防除適期決定ほ（3地点）における7月1～4半月のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は0頭（平年97.3頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 園地への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。
- イ 発生が多い園地では、ネオニコチノイド系剤（RACコード：4A）、ピレスロイド系剤（同：3A）を散布する。

7 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ハマキムシ類	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

K ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ベと病	—	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ７月中旬の巡回調査における発病葉率は０％（平年0.0％）、発病果房率は０％（平年０％）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病葉や発病果房は感染源となるので焼却するなど適切に処分する。

イ ボルドー剤（ムッシュボルドーDF、Zボルドーなど）は薬害（落葉）防止のため、クレフノン100倍液を加用して散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 灰色かび病	—	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ７月中旬の巡回調査における発病葉率は0.4％（平年0.3％）、発病果房率は0.3％（平年0.2％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病葉や発病果房は感染源となるので焼却するなど適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 晩腐病	—	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 開花前（５月下旬）の巡回調査における発病花穂率は０％（平年0.0％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病果房、巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は丁寧に取り、焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アザミウマ類 （チャノキイロアザミウマ）	—	やや多い （前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ ７月中旬の巡回調査における被害果房率は０％（平年０％）で平年並だった（ /±）。

ウ 防除適期決定ほ（２地点）における７月１～４半旬の黄色粘着板への誘殺数の合計は12頭（平年20.8頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発生が多い場合はアグロスリン水和剤（RACコード：3A）、エクシレルSE（同：28）、ディアナWDG（同：5）、モスピラン顆粒水溶剤（同：4A）などを散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

IV. 気象予報

令和8年7月23日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（7月25日～8月24日）

（1）予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。2週目は、気温がかなり高くなる可能性があります。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	30%	50%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	40%	30%	30%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

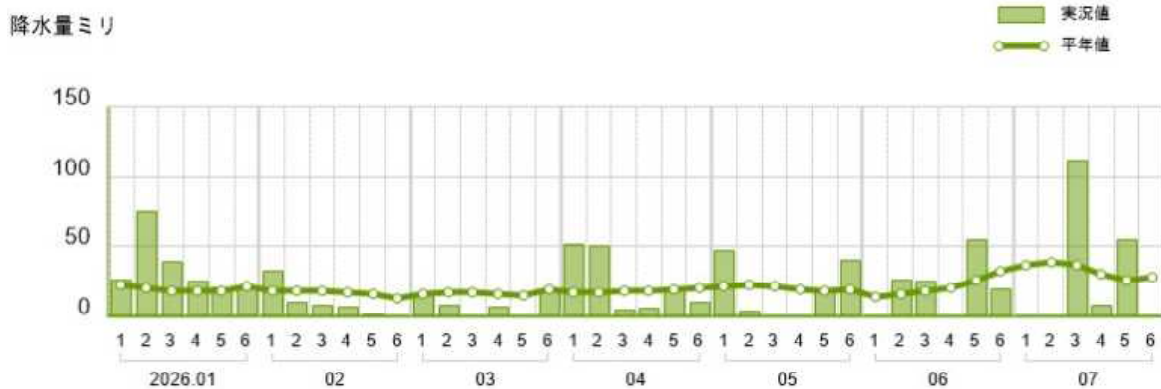
	低い	平年並	高い
7/25～7/31（1週目）	20%	50%	30%
8/1～8/7（2週目）	10%	30%	60%
8/8～8/21（3～4週目）	20%	30%	50%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

日数	～ -6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生 日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40%で高い（多い）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

令和8年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用を徹底しましょう！

農薬の使用にあたっては、十分な注意が必要です。

1 農薬に過度に頼らない防除を心がけましょう！

健全な種苗や抵抗性品種の使用、防虫ネットや粘着板の設置、マルチによる抑草等、農薬に過度に頼らない防除を積極的に行いましょう。

2 使用前には必ずラベルを確認しましょう！

農薬のラベルに記載されている使用基準は必ず守らなければなりません。
使い慣れた農薬でも使う前に必ずラベルを確認しましょう。



〇〇×× フロアブル				農林水産省登録第△△△△号			
作物名	適用病害虫	使用回数	使用回数	使用回数	使用回数	使用回数	〇〇〇〇号 含有成分の 使用回数
トマト	アブラムシ類	2,000回	※1 ※2	1回/10日 まで	150～200回/10日	4回/10日 (10日間は1回)	〇〇〇〇号 含有成分の 使用回数
ハゴイロ	ハゴイロ	1,000～1,500回		1回/14日 まで	200～300回/10日	3回/10日 (10日間は1回)	

対象となる病害虫です。

記載されている方法以外では使用できません。

この回数を超えてこの農薬を使用できません。

記載されている濃度の範囲内で散布しましょう。

登録番号が記載されている登録農薬を使用しましょう。

使用できる作物です。記載されていない作物には使用できません。

記載されている希釈回数より希釈回数では使用できません。

使用できる時期です。記載されている時期以外には使用できません。

「〇〇〇〇」には有効成分名が書かれており、この成分を含む農薬は総使用回数を超えて使用できません。商品名が違っても同じ成分を含む農薬があるので注意が必要です。

秋田県農林水産部



3 農薬の飛散(ドリフト)・危害防止の徹底を!

- ①農薬を散布する場合は、周辺の住宅地や農作物に配慮し、事前に近隣住民等に知らせるようにしましょう。
- ②風がない又は弱いときに散布し、風速が概ね3m/秒を超えたら直ちに散布をやめましょう。
- ③散布位置や散布方向に、他の農作物等がないことを確認し、散布の際は適正なノズルと圧力で行いましょう。
- ④養蜂が行われている地区で殺虫剤を散布する際には、養蜂業者と連携をとり、早朝又は夕刻に散布する等、ミツバチへの危害防止を徹底しましょう。
- ⑤農薬使用の際は適切な防護装備の着用を徹底しましょう。
- ⑥その日のうちに農薬散布の内容を記録しましょう。

4 空中散布を行う際は適切な手続きを!

- ①ドローンや無人ヘリコプターで農薬散布する際は、機体の登録、飛行許可・承認取得等、所定の手続きを行いましょう。
- ②ドリフトや墜落等の事故が発生した場合は早急に報告してください。

5 農薬使用後は適切な方法で後片付けを!

- ①使用後の噴霧機やタンク、ホース、ノズル等の散布器具はしっかりと洗いましょう。(洗浄液は排水路や河川等に流してはいけません。)
- ②使用済み容器の中には農薬が残らないようにし、産業廃棄物処理業者に委託する等、適正に処分しましょう。
(市町村や地域等が回収・処分している場合は、そのルールに従いましょう。)
- ③余った農薬は、別容器に移し替えたりせず、施錠された場所に保管する等、保管管理を徹底しましょう。

～お問い合わせは、水田総合利用課、病害虫防除所又はお近くの地域振興局農林部 まで～

秋田県水田総合利用課 TEL 018(860)1785 FAX 018(860)3898

秋田県病害虫防除所 TEL 018(881)3660 FAX 018(886)3566



問合せ先

秋田県病害虫防除所	TEL 018-881-3660	秋田県果樹試験場	TEL 0182-25-4224
秋田県農業試験場	TEL 018-881-3326	かづの果樹センター	TEL 0186-25-3231
		天王分場チーム	TEL 018-878-2251